

識別番号	P 2 1
研究課題	儒教文化圏のキリスト教受容
研究代表者	宮本久雄（キリスト教文化研究所、神学科）
共同研究者	具正謨（神学科）、片山はるひ（人間学研究室）、増田祐志（神学科）、光延一郎（神学科）、大橋容一郎（哲学科）、佐久間勤（神学科）、高山貞美（人間学研究室）、竹内修一（神学科）
Summary	Aim of the research project is: to investigate the cultural characteristics which emerges from the encounter between Christianity on one hand, and the East Asian culture whose common basis of thought is Confucianism, on the other hand.

1. 本研究の目的および背景

東アジア、極東アジアでのキリスト教の受容や反発などを、神学、キリスト教文学、社会学、漢文学、東洋史など様々な専門の立場から多角的にとりあげて、儒教あるいは漢字文化圏特有のキリスト教のあり方を探る。

アジア諸文化とキリスト教文化との出会いは地域的特性により多様な形態をとるが、東アジア文化圏に関しては仏教との関係に主眼が置かれ、この地域の文化の根底に流れる儒教的思想との出会いはキリスト教受容の観点からは十分に考察されてきたとはいえない。中国、韓国（朝鮮）、台湾、日本の文化的共通基盤として儒教を捉え、キリスト教理解あるいはキリスト教との対決に見られる特徴を研究する。

2. 研究の方法・内容と共同研究員の役割分担

以上の共通目的のもとに、各研究員がそれぞれの専門分野の方法論に基づいて研究し、①儒教思想とキリスト教思想の比較研究、②儒教思想のキリスト教受容への影響、③儒教文化圏におけるインカルチュレーションと宗教間対話の可能性という三つの問題意識のもとに、総合的観点の構築を追及する。

《儒教思想とキリスト教思想の比較研究》

● 宮本は、「実心実学」をとりあげて儒教文化圏理解の一指針とする。実心実学の研究者金泰昌氏（公共哲学研究所長）によれば、中国における実心とは、王陽明の『伝習録』の一文「人心之得其正者即道心」が見事にこれを表しているという。すなわち「道を重んじ、道に従い、道を実行する心」である道心だということである。ところで韓国における実心とは「天地人に通ずる心」、つまり自己と他者、人間と自然が相通ずる心であるという。このような実心と学問の統合が「実心実学」であり、小川晴久氏（二松学舎大学大学院教授）は、この実心実学は、修己治人の学として示されるという。それは「己を修める資格のない人、人格のできていない人」の学は全く信心できないという意味なのである。しかし欧米の学問は自然科学をモデルにする故に、宗教学、哲学、さらには神学さえも「厳密な学」の理念の影響下に、実心（精神、人格）と学とが分離し、いわゆる価値中立型の学がパラダイム化され、それが今日、アジア儒教文化圏に浸透し「実心実学」の心性を破壊しているのが現状である。こうした歴史的現状にあって、本来のキリスト教思

想・倫理・文化は、その霊的人格面と学的思索が相互に浸透した「実心実学」といえる。そこで本研究における一つの課題は、この儒教的実心実学とキリスト教的「実心実学」とが共鳴する地平を見出し、そこに身をおいて、アジアと西欧の根元が協働する新しい実心実学を創造し、現代世界および東アジアに一つの学的霊的協働と共生の次元を披き示すことにある。

● 具は、韓国のキリスト教布教の背景となった朝鮮後期の儒教思想である朱子学を研究し、儒教的な天観と人間観がどのようにキリスト教的に変容したのかを紹介する。具体的には、18世紀後半に書かれたキリスト教の教理書や信心書である『主教要旨』、『上宰相書』、『天主歌辞』などを研究することによって、キリスト教の受肉における朝鮮儒教の思想を明らかにする。

● 竹内は、「徳概念を鍵とする儒教とキリスト教の比較」を研究テーマとする。儒教は基本的に徳倫理である。徳は善との関係において考察される。換言すれば、徳とは、それによって人間がより善い人間へと自らを涵養していくものである。儒教における徳の特徴として、次の二点を指摘できる。一つは、徳の涵養は単なる個人の営みではなく、共同体を通して行われるということ。もう一つは、この徳の養成は、決して抽象的概念の理解や体系的知識の把握のようなものではなく、身心が一つとなった人間の具体的経験を通してなされるということである。一方キリスト教においても、徳は重要な位置を占める。キリスト者にとっての真の幸福は神との一致にあり、あらゆる倫理的行為はそれを目指している。その際具体的な規範となるのは、イエス・キリストに他ならない。このイエスの福音の要請は、彼が私たちを愛されたように、私たちが互いに愛し合うこと、これである（ヨハネ 13:34 参照）。このように「徳」を一つの鍵概念とすることによって、共通の土壌に立って、儒教とキリスト教との関係を再考することができる。それによってまた、インカルチュレーション（日本文化への福音の受肉・体現）の新たな可能性が見えてくると期待される。具体的には人間の性を「善」と捉えた孟子（前 372～289 年）、および心を正すことを目指しその「実践」を説いた王陽明（1472～1529 年）の思想を、キリスト教思想と比較し、考察の手がかりとする。

《儒教思想のキリスト教受容への影響》

● 片山は、「日本文学におけるキリスト教の受容」を研究テーマとする。明治後期から昭和にかけての日本文学において、主として、太宰治、八木重吉、遠藤周作、三浦綾子などの作家・詩人におけるキリスト教受容の在り方、変遷を研究する。

● 大橋は、「明治・大正期における日本へのドイツ哲学の移入と、それに基づく日本の哲学思想、とりわけ認識論および倫理学の変遷」を研究分野とする。この分野は、儒教文化圏の下で成立した日本の国民道徳・国体思想とキリスト教的西洋哲学との関連を主たる内容とするものであり、本共同研究には不可欠のものと考えられる。具体的には、①明治期の国民道徳成立期、②大正期新カント主義の影響下における日本哲学、③第二次大戦直後の日本思想、をいずれもキリスト教との関係において見直すことが主たる役割分担となる。

● 佐久間は、「キリシタン時代の聖書受容」を研究テーマとして、キリスト教の立場から日本文化への聖書の適応がどのように行われたかを研究する。具体的にはペドロ・ゴメスの『神学綱要』の邦語への抄訳版をもとに、当時の聖書学が日本の文化的土壌に移植される際に見出される特徴を探求する。

《儒教文化圏におけるインカルチュレーションと宗教間対話の可能性》

● 増田は、「キリスト教側からの諸宗教受容と対話の可能性」を研究テーマとする。キリスト教

と諸宗教の歴史について。カトリック教会公文書や回勅、現代カトリック神学者の考え。とくに、東アジア（韓国・台湾）の神学者の考えについて交流を含めて探る。

● 光延は、「東アジアにおける歴史認識と和解の問題——東アジアの平和にとってのキリスト教」を研究テーマとする。東アジア各国間には、侵略をめぐる不幸な歴史があり、これを度外視してこの地域の現在と将来について語ることはできない。しかしながら、近年、政治状況の変化に伴ない、過去についての歴史認識が歪められたり、学校での和解に向けた教育が十分になされない状況が醸成されつつあることが危惧される。こうした中で、東アジアの平和のための共通の思想的基盤について調査し、和解と平和についてキリスト教がいかなる役割と課題をもっているのかを探究する。

● 高山は、「親鸞の教えと宗教間対話」を研究テーマとする。親鸞（1173～1262年）は、儒学や歌道で朝廷に仕えた日野家出身であるが、仏門に入り、遂には専修念仏の教えに帰依した人物である。キリスト教と浄土真宗との信仰観の類似・相違については、多くの研究者が興味を示すところだが、本研究活動の中で儒教・仏教・キリスト教の宗教間対話を視野に入れて親鸞研究を行う。